背振山～思い出に残ればいいな～

【報　告　者】T中 Dr
【日　　時】2009 年 1 月 25 日　　【天　候】雪
【参　加　者】T中 Dr　U津　M下　K谷（見学者）
≪コース≫
椎原⇒車谷⇒気象庁連絡道路⇒唐人の舞⇒椎原峠⇒椎原
≪　報　　告　≫

この報告書を読む人に最初に伝えたい。この山行は、歴史的山行である。なぜならば、私T中 Dr が、会員で最年少だからだ。むむむむむ。私が最年少なのだ。何度書いても心地よい響きだ。

椎原の集落に近づくにつれ、雪が深くなってゆく。椎原の部落で、バス道路から部落に入るとすぐ、道路にしっかり雪が乗っている。急な坂になると、下りの時のスリップが懸念される。車をおりた。林道をゆっくり進み、新しい林道にでる頃は、５～10 センチ程度の積雪だった。時折枝につもった雪が落ちる音と雪が降り止むと鳴く鳥の声以外は・・・、とても静かだ。見慣れている風景も新鮮で美しく見える。

林道から山道に入る。雪に覆われた山道を、雪の下の地形を想像しながら歩く。赤テープがしっかりついており、迷いそうもないが、なるべく赤テープに頼らずに進んでみた。

二股にでた。地図では左だが、踏み跡は右。赤テープも右。左の沢に道を探すが、地形を見ると両岸が迫り沢筋が狭い。少し偵察したが、左の沢に歩くべき道が入る隙間はなさそうだ。素直にトレースに従うことにした。トレースがなければ、おそらく無理してでも左に行っていただろう。地図読みのミスか、地図が違うのか。明確にしたいが、面倒臭い。老人はずぼらだ。

それにしても今日の学会は退屈だ。この報告書は学会の会場で書きあがりそうだ。筆を進めよう。

ピナクルに入る前、初めてこの雪の沢を登ったときのことを思い出した。今思い出すと、あのとき登ったのが本当に車谷だったのかどうかも疑わしい。ウールのシャツに買ったばかりの赤いダウンジャケット、黄色いヤッケをきて、膝まで雪に埋まりながら進んだ。靴はなにを履いていたのだろう？ラリグラでUさんから買った安物の靴だったろうか。本当にあれは安物の靴だった。それで正月の西穂に行くと言ったら、売ったUさんは、指を切ることはないだろうと言って笑っていた。だから、店は信じられない。スパッツは、編み上げのオーバーゲイターかな？ニッカーボッカーにニッカーホースだったろう。みんなラリグラで買ったな。まだＳさんが入店したてだった

っけ。帽子は？スキーで使っていた毛糸の帽子だったかな。汗をいっぱい掻き、目もかすむようにして進んだ。たまたまバスで一緒になったおじさんから、「脱いだらどうだ」といわれて、山では暑ければ脱いでもいいんだと知ったことを思い出した。トレースのない雪の中で道を見失い、沢沿いを歩いているうちに、足を滑らせて沢水で靴下を濡らしてしまった。などなどの、思い出に一人だけ浸っておれるのも、今回は私が最年少だから・・・。

それにしても今日も暑い。帽子は汗で濡れ、スーパードリューの内側は汗が滴となり流れ落ちているようだ。冬山は暑さとの戦いだ。ところでスーパードリューの前はドリューだったし、その上位品は、ミディだ。こんなことを書いても最近山に登り始めた人にはわからないだろう。いや、わからなくてもいいんだ。人にわからないことを楽しみにできることが山を楽しむこつなんだ。達人になれば、藪漕ぎだって、ダニ、ヒルうじゃうじゃの谷だって、40 度を越える熱帯の山だって楽しみにすることができるはずだ。（でも私は望まない。）妄想ついでにドリュー、ミディとは何だ？疑問は次々にわいてくる。

うん、妄想に浸っていたら、稜線直下の急斜面に出てしまった。積雪は 30～50 センチ。K谷さんのアイゼンワークの確認のためアイゼンを装着する。久しぶりのアイゼンの感触。雪は比較的さらさらしており、気持ちがよい。気持ちがよいのでつけたまま連絡道路の上を歩く。ゆっくりと上下する稜線の道を進むが、ガスのため眺めがない。やけくそになりアイゼンをはいたK谷さんを岩に登らせた。滑って登れない。年寄りは気まぐれだ。でも、若者はそれ以上に気まぐれだ。いつも老人は振り回される。今日は年寄りが 3 人だ。愚痴も言えない。また、妄想に入ってしまった。

気がついたら新しい登山道に出ていた。あとは林道を歩いて帰るだけだ。なにもドラマはなかった。でも、老人の毎日はそんなものだ。たまにドラマがあれば、怪我か病気だ。今日の山登りで私はなにを得た。10 年後には、今日の山行は、ボケ老人の記憶から消えているだろう。でも、やはり背振は背振として在りつづけ、雪は、その年の雪として積もり、そして溶けるだろう。人間だけは年をとり、そして死んでいくだろう。ピナクルには若い人が入り、そして、同じ山を新鮮に登っていくだろう。

今日も何事も無く終わった。でも、今日の学会はまだ続いており、退屈な演者の話が続いている。そろそろ腰が痛くなってきた。

（注）ドリュー、ミディ：フランスアルプス。シャモニー近郊にある針様峰。アルパインクライミングで有名。

Uさん：ラリーグラスの（たぶん）現社長。当時は、赤坂の奥まった路地の間口１間の店で軒先にザックを下げて売っていた。

Sさん：ラリーグラスの最初で、当時唯一の店員。